

令和6年度（2024年度）滋賀大学教育学部附属幼稚園 学校評価

I. 附属幼稚園の現況

(1) 園名 滋賀大学教育学部附属幼稚園

(2) 所在地 滋賀県大津市昭和町10-3

(3) 学級数・収容定員

3歳児 1学級 32名

4歳児 2学級 48名

5歳児 2学級 48名

(4) 園児数

3歳児 すみれ 24名

4歳児 さくら 18名 もも 18名

5歳児 あやめ 20名 きく 21名

計101名

(5) 教職員数 園長(併任)1名 副園長 1名

担任 5名

教諭(大学採用) 2名 (県教委派遣) 1名

任期付臨時講師 2名

(県教委派遣教諭1名が育休中につき代替臨時講師1名)

副担任 5名 (5歳児担当2名、4歳児担当1名、3歳児担当2名)

養護教諭 (県教委派遣) 1名

用務員 1名

計15名 うち育休1名

2. 附属幼稚園の特色

- ・滋賀大学教育学部附属学校園に共通する教育理念としての「いまを生きる」という言葉に象徴されるように、校園で自らの問題意識と関心をもち、自らすすんで課題に取り組み、様々な困難を乗り越えながら最大限の自己実現を達成しようとする子どもの姿を大切にしている。
- ・市内最大級の園庭を有し、伸びやかに心と体を動かして遊ぶ子供たちの育成を目指している。
- ・ながいきくん(大クスノキ)、たからのもり、ビオトープなど豊かな自然環境があり、季節による自然の移り変わりや生物との出会いに心を動かし、不思議・感動から探究につながる保育を推進している。
- ・一人一人の子供の主体を大切にし、自己発揮できる環境を整えると共に、互いのよさを感じあいながら生活する充実感につながる取組を推進している

3.附属幼稚園の使命

滋賀大学教育学部附属幼稚園として

- (1) 幼稚園教育要領および教育理念「いまを生きる」に基づいた教育を実践する
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う
- (3) 本学学生の教育実習を受け入れ、その指導を行う
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する

4.幼稚園の教育目標及び教育方針

(1)教育目標

- 健康でたくましい子供
 - 豊かに感じ、表現する子供
 - よく考え、自分で行動する子供
 - 伝えあい、力を合わせる子供
- 3歳児…幼稚園に慣れ安心して過ごす
4歳児…ものや友達に興味をもち、かかわる
5歳児…仲間と共に協同的な関係を育む

(2)教育方針

- ・幼児の主体的な学びを尊重しながら保育をすすめます。
- ・幼児の本来もっている力をはぐくみ、伸ばすことを大切にします。
- ・好きな遊びに思う存分取り組むことのできる環境を、幼児と共に創造します。
- ・幼稚園で安心して過ごすことができ、のびのびと自分を出せるように支えます。
- ・一人一人の発達や個性に応じたかかわりを基本に、互いに育ちあえる生活を目指します。

5.幼稚園経営の重点

(1)保育の質を向上するための保育実践研究の推進

研究テーマ「“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を育む保育」
～子供たちとの園環境と暮らし～

(2)豊かな自然環境との関わりや、興味、関心をもったことへの探究的に取組を通した、 子供の感性と探究心を育む保育実践とメディア機器を活用した保育実践の推進

(3)教育研究の発信などによる開かれた教育課程と幼稚園経営・家庭との連携

(4)教育実習の指導充実

6. 幼稚園経営の重点 具体的な取組と評価

(評価の基準)自己評価:A 高いレベルで達成できた B 達成できた C 一部達成できなかった D ほとんど達成できなかった

関係者評価:「自己評価について」A 適切である B おおむね適切である C あまり適切でない D 適切でない E その他

(1)保育の質を向上するための保育実践研究の推進 研究テーマ「“いま”を生きる×“これから”を生きぬく力を育む保育」～幼児との環境と暮らし～

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
既存の園環境を新しい視点で生かし、環境がもつポテンシャルを引き出す	園庭環境を生かした遊びや暮らしの充実	昨年度までの実践を生かして、園庭環境の工夫や子供の遊びの変容が見られた。	「附属幼稚園ならではの取組」にとどまらない、県内外の就学前施設への広い発信。		附属学校園には時代の先を行く研究が求められる。次の幼稚園教育要領改訂も視野に入れ、新しい教育の発信を期待する。		保護者を巻き込んだ園庭環境の整備は、経営への理解にもつながる。さらなる園環境の拡充と深化を進めていきたい。また、引き続き子供が共に主体となる園環境の充実に取り組みたい。
環境との関わりに暮らしを位置付けていくことにより、幼児の気づきを深める	園内研修における事例検討や研究会を通して幼児の遊びと暮らしから環境の意味を問い合わせ直す	環境構成、開発だけでなく一つ一つの環境が幼児の暮らしと密接に結びつくことにより幼児自身の気づきの実感や深まりにつながった。	今年度新たに取り組んだ好事例を次年度以降の子供たちと共に継続、発展させていくこと。	B	幼児の主体的対話的な学びは、「ワクワクドキドキする環境づくり」に尽きると考える。日ごろの取組に敬意を表す。	B	SDGsの視点から取り組む保育研究も3年次となり、園の経営の柱となっている。新しい発想からの取組への挑戦をしていきたい。
研究成果から教育目標にある目指す子供像について捉えを確かにする	研究事例から教育目標にある子供像を照らし合わせ評価を行う	教育目標と実践事例を重ねて子供像について整理した。 ※幼児教育じほう寄稿 ※書籍出版	教育目標に示す子供の姿については社会や教育の変容から新たにイメージの共有をしていくこと。		新しい環境にもSDGいや循環型社会を意識したもののが見られる。園の精力的な取組を幼児にどのように「見える化・意識化」させていくかが課題である。		子供たちの生活と身近なテーマの研究が学びにつながる。
	大学プロジェクトと連携して学びを深める。	小2生活科と協同した学習プログラムの実践					

(2) 豊かな自然環境との関わりや、興味、関心をもったことへの探究的な取組を通じた、子供の感性と探究心を育む保育実践とメディア機器を活用した保育実践の推進

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
ビオトープやたからのもりなど、自然との関わりなどを通した豊かな感性と探究心を育む保育の充実	季節による変化や生物との出会いなどからの子供のつぶやきを継続的に保育に生かす。 ビオトープに住む微生物の観察を通して様々な命があることに関心をもつ。	ビオトープでは想像以上に豊かな生態系が育まれ、関係機関や家庭ともつながりながら子供の興味関心をさらに引き出し、探求的に関わる姿が多く見られた。保護者からの多くの関心が寄せられた。 情報を得たり共有したりする際にメディア機器を活用することができた。	5歳児はビオトープ造成から関わっていることもあり、高い関心をもつているので、今後の学年でも継続していくように環境や取組の工夫を進めしていく。		まずは教員が子供と楽しみながら新しい機器に慣れることができることが必要だと考える。直接的な体験を軸にしながら、より探究や学びにつながるような有効な活用を実践から見つけてほしい。		ビオトープをはじめとする園環境において子供たちは豊かに感性を育んでいる。また、保護者からの評価も非常に高い。今後も継続的に拡充、活動の深化をめざして一年を通して幼児の暮らしに取り入れていきたい。
ICT・メディア機器を活用した保育実践の推進	各々の興味関心や、知識・技能などをメディア機器などで共有する。	身近な場所でタネをまいて生長の様子を観察し、土づくり、施肥、収穫までを通した栽培活動に取り組んだ。	教員が積極的にICT・メディア機器を活用することにより、保育活用への新たなアイデアの工夫	A	すでに生成AIが使われている実情も踏まえ、教員のAIリテラシー向上の必要性も問われる。	A	ICT環境については各クラスにIpadを導入し、少しずつではあるが実践に生かすようにしている。去らない有効な活用を目指して工夫を重ねたい。
幼児が主体となって取り組む栽培活動の充実	栽培に関わる様々な仕事を幼児とともに取り組む	種まきから、終いまで子供たちと共に考えやり切り、例年以上に花や野菜を通して感性を響かせながら子供も教師も遊びを楽しんだ。			小学校との連携については生活科が中心となって展開されることが妥当である。主体的な学びに向けてディスプレイの活用など可視化が有効ではないか。		栽培活動は大学との連携も生かしていく。

(3) 教育研究の発信などによる開かれた教育課程と幼稚園経営・家庭との連携

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
通信・掲示等により保育の様子を通して、願いやそのことによる幼児教育の啓発	読みやすく理解につながる通信記事の精選と工夫をすすめる。 日ごろの様子をなかよしホール前モニターを活用して発信する。 SDGsに係る情報を掲示し園の研究、実践への興味関心を高める。	なかよしホール前のモニターによる季節ごとのスライドショー上映については保護者からの高い評価を得ている。また、その様子を通して子供の姿や園の願いを語るきっかけとなっている。 各サークルと連携して、発表の場を子供たちの生活にも取り入れ、生かすことができた。	情報や映像の定期的な更新。特に行事前のスライドの写真販売、行事のビデオ上映などについて。 育宝会サークルの活動停止を受けての園との協働の新たな形の模索	A	時代の変化のスピードがより速くなり園としては大変だと思うが、園、保護者、地域が互いを尊重し合う意識を醸成し、新たな取組が進んでいくことを期待する。 給食の導入など、新しい取組を進めていることは素晴らしいと思うが、丁寧に進めてもらいたい。	A	幼稚園通信についてはコメント欄を通して保護者との往還を行っており、園の教育への理解につながっている。途切れずに続けていきたい。 また、モニターでの写真紹介も定期的に更新したい。 保護者を巻き込んだ取り組みを推進していくことにより、園経営、研究への理解を深めることにつなげたい。
育宝会と連携し、幼稚園教育への保護者参加意識を高めることによる園経営への理解と連携	育宝会サークルによる保育・行事協力の機会をつくる。	保護者ボランティアの協力を得て園の自然環境の維持管理を進めることができた。	附属幼稚園におけるこれまでの決まり事など、マナーの向上への理解と取組の推進		日ごろの様子をモニターを通して紹介できているのは良い。定期的な更新をしていくことが大切だと思う。		頼りにされる附属幼稚園を目指して、様々な研究・研修の機会を広めていきたい。
教育研究発信と、幼児教育への理解向上に向けた取組の強化	保育トーク広場はじめとする幼児教育セミナーの開催	※給食の試行的導入 保育トーク広場3回開催 幼児教育セミナー2回開催					引き続き保護者との対話からニーズを探っていく。

(4) 教育実習の指導充実

重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己評価			関係者評価		今後に向けて
		達成状況・成果	課題	評価	意見	評価	
教育実習による学びをより深める	事前学習・実践の振り返り・事後のまとめについての指導を行う。 実習の振り返りを学年単位で行う。 振り返り時の意見交換を自身の実習にフィードバックできるようにする。 主体的な実習となるように一人一人の理解に応じた指導を行う。	それぞれの指導については担当、担任、副園長で相互に連携して行うことができた。 実習の振り返りを複数の実習生で行うことができるのは附属園ならではの学びである。また、実習生同士での学び合いが次の実習に生かされている場面も多く見られた。 実習期間後も園の行事などに積極的に取り組む学生が多く、大学における学びを実践知として積み上げることができた。	遠方からの通勤や、体調不良時の対応など遅刻や欠席があったことは残念であった。 また、社会人としてのマナーについても指導する必要が生じており担当教員の負担となっている。 実習生の資質にも差異があり、一人一人の力量に合わせた指導が難しいことがあった。 卒業後の進路に就学前教育施設を選択しない学生も見られるようになってきている。	B	多様性を認め合いながら様々なことを進めていくことを求められる時代にあり、学生の価値観も多様になっていて指導も難しいと察する。状況・成果の通り学生同士の学び合いを生かすことには着目されているので今後も有効だと考える。 子供たちにはいろいろな人の関わりは良い経験になっていると思う。保護者にも情報を伝えるとより良いのではないだろうか。	B	幼稚園教育への夢が語れるように教育実習生への指導を進めていきたい。 クラス数が減っていく中で、実習指導の負担が増加することが予測されるため、様々に対応を考えていくことが必要となる。